

ひょうたん島通信

大槌発! 第45回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島（とうらいじま）という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



いよいよ再出発! 7月20日に新棟完成記念式典

河村知彦 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター長・教授

震災から7年、ようやく新しい研究実験棟と宿泊棟（共同研究員宿泊棟）が完成しました。旧敷地より数百メートル山側に再建された3階建ての研究実験棟は、周辺住宅地からひょうたん島を望む景色を妨げないよう斜面を利用した圧迫感のない建物になっています。大きな窓と広い廊下が特徴的な非常に明るいつくりとなりました。研究機器等の整備は現在進行形ですが、今年度中には被災以前の機能を完全復旧させる予定です。海側の部屋から眺める大槌湾とひょうたん島はまさに絶景で、世界中から集う海洋研究者に素晴らしいインスピレーションを与えてくれることでしょう。平屋建ての宿泊棟は共同利用研究者のための施設で、最大35名の受け入れが可能です。広い食堂スペースはアットホームな雰囲気に仕上がりに、小規模なセミナーなども開催できます。

7月20日には大槌町内の「三陸花ホテルはまぎく」で新棟完成記念式典・祝賀会を開催し、多くの来賓をお迎えしました。翌21日の一般向け施設見学会には200名を超える方々にご来場いただき

ました。研究所の卒業生でパルンアーティストの須原三加さんによる素晴らしい作品やパフォーマンスが、この記念すべき日に花を添えてくれました。

新装開店したセンターでは、海洋研究拠点としての活動はもちろんのこと、地域の知恵袋的存在として復興・発展にも貢献したいと考えています。研究実験棟のエントランスホールと隣接するギャラリーは広く一般に開放し、研究者と地域の人たちが交流を深める場として活用したいと思います。エントランスホールの天井一面には、新進気鋭の現代アート作家、大小島真木さんによる「Archipelago of Life 生命のアーキペラゴ」が描かれています（表紙参照）。海をイメージした幅8メートル近い大作で、大気海洋科学とは異なる芸術の視点から海を楽しむことができます。また、大気海洋研究所

新しい研究実験棟と、多くの来賓にご出席いただいた新棟完成記念式典。



と社会科学研究所の協働による文理融合型のプロジェクト「海と希望の学校 in 三陸」を4月に開始しました。三陸各湾の海洋科学・社会科学的特性をベースとしたローカルアイデンティティの再構築を通じ、地域に希望を育む人材を育成することを目的としています。詳細については、今後このコーナーでお伝えしていく予定です。

皆様のお力添えにより、センターは大槌の地で新たなスタートを切ることができました。今後は、これまで以上に国際的な沿岸海洋研究拠点として機能すると同時に、被災地にある研究機関としての役割を果たしていきたいと考えています。

調査船「弥生のつばやき」 「新青丸」と共に



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

この7月は、国際沿岸海洋研究センターのイベントが盛り沢山でした。ひょうたん島通信でご紹介した新棟完成記念式典の翌日（7月21日）には、地域住民の皆様を対象とした「施設見学会」が開催され、多くのお客様にお越し頂きました。このいずれも、私は海から眺めているのみでしたが、7月23日には、私がメインキャストを務める「『新青丸』との共同調査」に参加しました。学内広報バックナンバー1459「ひょうたん島通信 第22

回」に「新青丸」の紹介は譲りますが、長さにして私の約5倍、総トン数に至っては100倍以上の体格差のある「新青丸」と共に、大槌湾という晴れ舞台（当日は生憎小雨混じりの天候でしたが）に立つことが出来ました。

「新青丸」は引き続きの調査のために太平洋へ漕ぎ出して行き、私も、船出を見送りつつ別の調査へ向かいました。

今回は好天の下で、改めて共に舞台に立ちたい、と心から思いました。



見よ、この体格差。でも決して引けはとりません。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）